

【虚実の考え方と薬方 3】

(虚実の本質を考えてみましょう)

要するに虚実はいくまでも相対的な概念であり、様々なレベルがあります。従って一律に「ここまでが実、ここからが虚」といった具合に線を引き、画一的に「あなたは実証ですね、おや？あなたは虚証でしょう」と論ずることはできません。虚実の判断は漢方診療の根本に関係しますが、実際の臨床では患者さんが健康であった状態と比較して、今がどう変化しているかをみる必要があります。

また「表虚(ひょうきょ)裏実(りじつ)」といわれますように、表(目に見える部位)が虚して裏(目に見えない臓器組織)が実の場合がありますし、またその逆もあります。

「なんか、わかりにくいなあ」という声が聞こえてきそうですね。もうちょっと頑張つて読んでみてください。

さらに、「実ノ中ニ虚ガアリ、虚ノ中ニ実ガアル」といわれますように、虚実が複雑に交錯している場合もあります。更に患者さんの全般的な病態だけでなく、局所的な臓器の問題として、たとえば「腎虚(じんきょ)」や「脾胃(ひい)ノ虚」あるいは「肝ノ実」としても診断します。見た目では判断しているわけでは決してないのです。